

水爆による三つの罪 アメリカは今度の水爆実験によって、少くとも三つの罪を犯したことによって、神のさばきを受けなくてはならない。

第1の罪。それは人間をモルモットにした罪。これは最も重い罪であって、絶望的な罪である。これによって世界の諸民族はアメリカの政策をすべて疑うようになり始めた。

第2の罪。これは公海中に勝手に危険区域をもうけた罪。それは区域が北側にだけ半円であることによって3倍の重い罪にとわれる。すなわちこの南側には人間が住んでいるということによって第1の罪に通ずるからである。その結果、日本の遠洋漁業およびこれら魚獲物によって蛋白質を補給する全日本国民の怒りをかい、南洋諸島住民のぼろれいをはらいのけるのに、アメリカインディアンに対するよりもずっと苦しなくてはならない。

第3の罪。日本の気象技術者を侮った罪。この罪は比較的軽くはあるが、そこに働いている人間の質を考えると重大である。彼等は傷を受ければ受けるほど抗体がふえるばかりで、その生産能力も馬鹿にならない。すなわち学会において水爆反対決議を満場一致で決定し、今度の水爆実験がアメリカの非人道的おどかしであることを気象学的事実から一つ一つ理解させたという全くアメリカの意図に反した結果をあたえた。(αΩ)

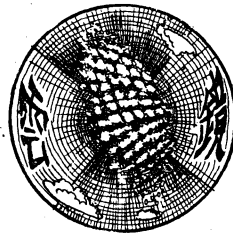
梅雨空に感あり 梅雨や秋霖期になると、いつも予報が外れると予報利用者から文句が出てくる。これに対して予報担当者は、この時期は天気変化が微妙なので予報がむずかしく、やむをえないとしている。一昔前と現在の予報成績は余り変っていないようである。各測候所の予報成績の比較を見ると差が目立つことがあるし、予報当番による差が目立つこともある。予報の個人差は天気図の描画の上手下手などにはあまり関係しないし、その人が学問的に非常に優れているかどうかということにも関係しないようである。

気象学の大目的は、今さら取上げて論ずることでもないが、シノプティックスの立場からは十分な解釈が、不十分なが現在ある資料で可能な限界まで行われ、それが一步一步着実に積み重ねられることが望ましいし、また一方では、複雑な気象現象を把握できるような測器の製作と、観測網の両検討が望ましいし、その上に立脚して現象を記述する法則が導びかれる。これらの点に総合的な検討を加えねばならないという動きが現われて来ている。

だが、気象学的な研究精華を予報に適用するためには技術化が必要であり、技術化をするための基礎的な研究、例えば予報に必要な気候学的調査があまり行われていないことが大きな欠陥となっている。(M生)

空から降る灰 ビキニの死の灰以来、あちこちで空から降って来た灰が話題になっている。降灰といえは火山爆発によるものが主で、これに似たものといえは、大陸からの黄沙や、附近の砂ほこりが吹き上げられた風じん、植物の花粉などであったが、今度は原子灰が仲間入りをした。

麦の黄錆病の病原菌は黄沙と共に飛来するといわれ、風じんは呼吸器や眼の粘膜をいため、ウイルスや寄生虫卵をまきちらし、細隙を通して精密機械の内部に侵入し、思わぬ故障を起すこともある。外国では花粉病という問題も起っている。火山灰をかぶった桑をうっかり与えて、蚕が害を受けた例も少ない。火山灰は上層気流により地球全体を包み、地上に沈降するまで三千年もかかることがある。この間に火山灰はその直径より波長の短い太陽放射が地面に達するのを遮断するが、地面からの放射は波長が長いので火山灰の浮遊する大気を通過してしまふ。明治17年の凶冷は、前年夏のクラカトア火山の爆発が原因だともいわれている。原子爆発もやたらにあちこちでやったのでは、空中に浮遊する微粒子が累積して飛んだ影響が現われはしないだろうか。火山と爆弾とでは桁がちがうのだから、こんなことは杞憂だというなら幸いだが。(AM)



民主化は行われ始めた 昭和29年度気象学会総会は5月20日から3日間にわたり、気象研究所で開かれた。学会全体からうける雰囲気や、その後の役員改選の結果からみて、この会合が気象界にとって一つの大きな転向点となっていることはまちがいない。

第1日は行われた原、水爆禁止についての進歩的な決議の決定、第2日目の数値予報グループを中心とした研究発表及びこの後で行われた各方面からの人の暖かい思いやりのある討論、第3日目の季節予報ならびに Cloud physics のシンポジウムなど、十分な準備の後になされた若い人々を中心とした動きは実に目ざましいものがあった。24日役員改選の結果にあらわれた民主的な学会役員統一推薦委員会側推薦者の圧倒的勝利、われわれは一つの歴史的点にたっていることを深く認識し、今迄のあり方を厳正に批判し、広範な人々からの心からの協力のもとに新たなる第一歩をふみ出さなくてはならない。またこれらの活動の下にあって再建された気象台職員組合の方々の献身的な奉仕、協力なども今後の活動にとって決してわすれてならない所であろう。

他の学会の民主化は1950年頃から行われ、地団研を中心とした地質学会については井尻氏編のすぐれた著書もあり、おくれさせながら民主に化の線そって動き始めた気象学会にとっても参考になる点が多いであろう。